

# 18. 川に化けたソバ畑

## 近藤 角治

※明治22年10月25日生、有珠郡より転住。

私が明治44年1月、上興部の小林四郎左衛門方に奉公人として入りました。まだ独身でした。

そのうち、近くに店をやっていた村井さん（丑之丞）が共同で、中藻に農場を始めることになり、事務所を建てる材料を木挽きするため、45年（大正元年）に頼まれて中藻に入りました。そのころは、沢の平地も大木が密生しており、村井さん等は、あの木を伐って流送しただけでも、大儲けしたものだと思います。

農場の最初の事務所は、今の中藻橋の少し下の高台に建て、後に、七重へ越える山道の下り口近く（旧田中薫治）に、新しく建て直しました。

私は菊池金夫さんの近くに、開拓小屋を建て、独りで寝起きしていたころは、開墾よりも木挽きの方が多く、農場管理人の村井さんは、沼田方面から沢山の木挽や、伐採夫を連れて来て造材をしていました。

伐り出された木材は、藻興部川を流送しましたが、重いナラやタモは川底に沈むので、満州枕木（広軌用）の2丁どり、4丁どりなどに挽き割るため、木挽きを沢山入れたのです。

松材も角材に削りましたし、シコロ、セン、カツラなどもみんな角材に削りました。

山岸（仮名）さんが狐に化かされたのは、このころで、諏訪峯吉さんがまだ、先生として赴任前ですから、大正4年ころでしょう。8月末か、9月初めころで、朝晩大分寒くなり、夜露がどっぷり降りるころでした。

私は、仕事に疲れてぐっすり寝込んでいると、「近藤さん、角治さん」と叫びながら戸を叩く声に目が覚めました。時計がなかったので時間が判りませんが、11時ころだったと思います。何が起きたかと、驚ろいて起きてみると、近くに住む山岸さんのお内儀さんです。聞くと、山岸さんは昼近くに六興の部落に買物に出掛けてまだ帰って来ないので、或いは熊にでも食われたのではないかと心配の余り、私を起したのだそうです。

※「このころは、中藻へ入る道路は、六興橋の少し下流から興部川を渡り、突き当たりの小沢を上って、田中の沢（田中薫治の所、農場事務所附近）へ出る道が多く使用されていた。」

山岸さんは、大変酒好きでしたが、正体を失う程にはならない人なので、私も、これは何かあったかと、感じたので二人で途中まで探しに行くことにしました。

外に出てみると、雨上がりで、その頃には珍らしくもやがかかり、薄ぼんやりと明るく、提燈がなくても歩ける程でした。二人は今私の住んでいる附近まで来ると、2反歩程の畑に、ソバがバラ蒔してあり、真白に花盛りでした。

そのソバ畑の中を、何かが歩き廻っている気配がし、私はてっきり熊だ、と思った途端に、髪の毛が一本立ちになるほど驚き、じっと息をこらして様子を見てみると、何か呟く声が聞えてくるので、尚も耳を澄ますと、「うう、深い、うう深い」と言いながら

歩き廻っているのです。山岸さんのお内儀さんは、「あれはうちの父ちゃんだ」と言って飛び出して行ったので私もついて行って見ると、矢張り山岸さんで、素裸に禪一本になり、着物を頭に掛けて、歩いているではありませんか。体は雨上がりのためびしょ濡れで、寒さに震えていました。

夢を見ているような顔をしている山岸さんに着物を着せて、二人がかりで家まで連れて帰り、無理矢理寝かせました。

次の朝早く、山岸さん夫婦が来て、お礼を兼ねて状況を話して呉れました。

山岸さんは、六興の古川の店で買い物をして、ついでに好きな焼酎の盛切りを飲んでいるうちに、小雨が降ってきたので、飲みながら晴れ間を待ち、8時頃になって雨も上がり、好い気分であのソバ畑まで来ると、大きな川があって、据をからげたのでは渡れないので、裸になって時間的に考えると一時間半以上もソバ畑をさ迷ったのだそうです。

白いソバの花が川に見えたのでしょう。買い物の品が見当たらないので、私も一緒に探しに行くと、ソバ畑の近くの道ばたに、買い物の風呂敷が、ずたずたに破られて、中に焼酎四合びん2本と白の木綿糸2把、それに小さい魚か何かの缶詰1個があり、一緒に少々買って来たという乾し魚は見当りませんでした。よく見ると缶詰は、鋭い歯で噛んだ傷がついていました。

山岸さんは、そう言えば、田中の沢の頂上附近から誰か尾けて来るような気配がしたので、2、3度振り返って見たが誰も居らず、余り気にしないで帰って来たそうです。

狐は、この乾し魚が欲しくて、山岸さんをだましたのでしょう。

山岸さん夫婦は、こんな話が農場内に伝わると、皆の物笑いになるし、世間から狐つきなどと言われるので、絶対に誰にも喋べらないでくれと、泣くように頼まれたので、私も可哀想なので内緒にしていたから、中藻の人たちは殆ど知らない筈です。

狐に化かされた語は、これだけですが、狐の嫁入れという狐火は、度々見ました。

夜、山の峯近く、点々と明るい堤燈の火のようなのが浮き上がることがあります。普通の火なら必ず後光がさすが、狐火はポウツとしただけです。狐が獲物を探すときの涎が光るのだという人もおりますが、本当のところ、どうしてあんなに火がともるのか分かりません。

狐火は、開拓当時からの人なら、必ず1、2度は見ている筈だが、今は狐に化かされた話も、狐火も見ることともなくなりました。人間が利口になったのか、古狐が居なくなったのか、両方かも知れませんね。